様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １２ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１３４０３

研究課題名（和文）国学政治思想史の再構築―本居宣長以前／以後―

研究課題名（英文）Reconstructing the History of Kokugaku Political Thought

研究代表者
島田　英明（SHIMADA, HIDEAKI）

東京都立大学・法学政治学研究科・准教授

研究者番号：１０８０２７０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「国学政治思想史の再構築―本居宣長以前／以後―」と題して、本居宣長とその前後の国学者たちの思想と実践の諸特質を究明するものである。近年、主要な研究対象が明治以降に移ったことも相俟って、近世思想史研究では西洋思想を接受する上でも重要な役割を果たした漢文脈に関心が集中してきた。その結果、多くの新資料の発掘や隣接諸学の進展を傍目に、国学政治思想の研究は沈滞してきたといってよい。この研究では、本居宣長を中心に、その先蹤および後継の必ずしも宣長学に還元され得ない個性もふまえながら、特に隣接分野における最新の研究成果を政治学に還元することに意を留めて、通史像の再構築を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国学は近世日本に花開いた最も純粋なナショナリズムの文化運動として、時に嫌忌されまた賛美されてきた。特にその政治思想は、「排外主義的」「独善的」「盲目的」といった否定的言辞で形容されるのが常であり、かれらの文藝や古典研究における達成が特筆されるかたわら省察に値しないものとして冷眼視されることも多かった。本研究は、隣接諸科学の成果や史料状況の改善をふまえながら、近世国学者たちの政治思想を再検討するものであり、また一人の対象に焦点を絞らず、通史像の再構築を試みた点で独自の意義を有するといえる。

研究成果の概要（英文）：This research, entitled "Reconstructing the History of Kokugaku Political Thought ", tried to reconsideration about the characteristics of the thought and practice of Motoori Norinaga and other kokugaku scholars. In recent years, as the main focus of research has shifted to the Meiji period, interest of many researchers has focused on the Confucianism, which played an important role in the reception of Western thought. As a result, while many historical records have been discovered and progress has been made in neighboring studies, research on Kokugaku political thought has remained stagnant. This research project attempted to reconstruct a general historical picture of kokugaku thought centering on Motoori Norinaga, and paying particular attention to the latest research results in neighboring fields that can be applied to political science.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：政治学　日本思想史　国学　本居宣長

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は「国学政治思想史の再構築―本居宣長以前／以後―」と題して、本居宣長とその前後の国学者たちを主要な分析対象として、国学政治思想史の通史像のブラッシュアップを試みるものである。研究開始当初の背景としては、次の三点を挙げることができる。

（a）政治思想史学における国学研究の停滞

近年、政治思想史学は近世と近代を股にかけてめまぐるしい進展を遂げている。しかし、主要な研究対象が明治以降に移ったことを受けて、近世思想史においては西洋思想の接受に重要な役割を果たした漢文脈に関心が集中してきた（渡辺浩、河野有理、眞壁仁、李セボン、濱野靖一郎など、例外にして重要といえるのは大久保健晴の洋文脈追求と相原耕作の語学説研究くらいだろう）。その結果、政治学者の手になる国学研究は今世紀に入ってからほとんど跡を絶っていた。隣接諸科学における進展の研究をふまえ、政治思想史学の観点と方法論に基づく国学思想の再検討をおこなうことが急務だと思われた。

（b）隣接諸分野における国学研究の進展および資料状況の改善

しかもこの間、政治学分野での沈滞とは裏腹に、隣接諸科学では国学研究は急速に進展し、資料状況も大幅に改善されてきた。歴史学や宗教学分野における後期国学者たちの学問およびネットワークの解明――宮地正人と吉田麻子を皮切りとする、三ツ松誠、天野真志、大沼宜規らの諸研究である。これらは時に新しい史料を用いながら多くの点で旧説をくつがえす新知見を提供しており、政治学研究においてもその成果をまず需要し研究史のなかに位置付ける必要があると思われた。

（c）申請者における漢学研究との連環

さらに、申請者はこれまで荻生徂徠以後の漢文脈について研究を進めてきたが、そこで明らかにされた諸特徴は国学のなかにも類似のものを見出すことが可能であった。たとえば性霊説における反擬古主義の主張、折衷学における新説提示を支える豪傑精神のありよう、また幕末志士たちに見られた歴史意識と政治的認識及び実践との連環などである。果たしてこれらは、漢学と国学に通底する特徴として同一視してよいのか、仮にそうだとすれば、それは互いの影響関係を意味するのか、それとも共通の背景から生まれた別個の現象とみるべきなのか。あるいは、やはり両者はそれぞれ十把一絡げにはし得ない個性をもつものなのか、そうだとすればなぜ一見似通って見えるのか。まったく新しい水準における国学研究のもと、こうした諸問題を省察する必要があると思われた。

２．研究の目的

上記三点（a～c）を受け、本研究では次の三点を目的と定めた。

（A）本居宣長およびその後続者たちの政治思想の再検討
（B）隣接諸科学もふまえた研究史の再整理
（C）A の成果の漢文脈との対照

いうまでもなく A が主目的であり、本居宣長、平田篤胤、鈴木重胤、香川景樹、伴信友などにつき、史料の調査と解析を進めた。通史像の再構築は個々の著述家たちの再点検を通すことでしかなし得ないからである。その際、A の作業を十分な水準で遂行するためにも B を並行して進めた。とはいえ、単なる副産物というわけではなく、政治学に固有の研究史のなかに隣接諸科学の近年の成果を還元し、布置関係を明らかにすることは、それ自体通史像の再構築において重要な課題のひとつである。そして、以上の成果をふまえた上で、C の解明を目指した。具体的には申請者のこれまでの研究成果（『歴史と永遠　江戸後期の思想水脈』岩波書店、2018 年としてまとめられている）との比較が主な内容である。

なお、研究開始時点では「本居宣長以前」――特に賀茂真淵の分析――にも時間と労力を割く予定だったが、宣長本人および「以後」の解明におもいのほか時間がかかり、本研究では十分に扱える見込みがなくなったため、結果的に「目的」から除外した。もっとも、成果の一部は注目すべき真淵研究である板東洋介の著作（『徂徠学派から国学へ　表現する人間』ぺりかん社、2019 年）に対する書評として公表している。

３．研究の方法

以上の目論見のもと、本研究では主に以下の手法と計画とに沿って作業を進めた。なお詳細につ

いては各年度の「実施状況報告書」をあわせて参照されたい。

【一年目（2020 年度)】
　まず近世国学の大成者である本居宣長につき分析を進めた。宣長については既に整った全集が存在しているので基本的にそれに依拠した。特に注意したのは次の二点である。第一に、政治学分野では宣長の思想はほとんど歌論書および一部の古道論に関する小冊(『玉くしげ』『くず花』など）にのみ基づいてきた。かれの主著『古事記伝』はその内容および重要性に見合った扱いを受けてきたとはいいがたい。本研究では『古事記伝』に詳細な検討を施した。第二に、その際、特に神話における「妙理」論の含意および、「人の世」以後の記述に留意した。前者は筆者の考える宣長政治思想における肝要な要素であり、後者はこれまでほとんど触れられていないからである。神話部分につき新たな理解を示すとともに、神話部分を偏重してきた従来の『古事記伝』研究の欠を補うことができたと考えている。

【二年目（2021 年度)】
　次いで二年目は、主に歌学派国学者について分析を進めた。具体的にとりあげたのは、本居大平、香川景樹、伴信友、伴林光平などである。政治学分野ではかれらについての研究は半世紀前の渡辺浩の論文（「「道」と「雅」―宣長学と「歌学」派国学の政治思想的研究」）が孤絶した成果であるから、それ以後の隣接分野の進展をふまえて研究史の再整理をおこなった。また、かれらの主張と漢文脈における性霊派との比較もおこなった。反擬古主義としての性格を共有しつつ、「まごころ」は「性霊」ではなく、技巧性や虚構構築への敵意はその論拠や倫理的含意において無視しえない差異があることを理解できた。

【三年目（2022 年度)】
　以上をふまえて三年目は、主に古道論者たちについて分析を進めた。具体的にとりあげたのは、平田篤胤、大国隆正、鈴木重胤などである。政治学分野におけるかれらについての研究は、四半世紀前の原武史の著書（『〈出雲〉という思想―近代日本の抹殺された神々』）以後跡を絶っているから、隣接分野の進展をふまえた研究史の再整理をおこなった。また、特に鈴木重胤は、篤胤と隆正の学統を継ぐ興味深い学者であるにもかかわらず、主著『日本書紀伝』の浩瀚さも相まって解明はあまり進んでいなかった。本研究では、中近世の他の日本書紀注釈と比較しながら、その分析をおこない、かれの個性と歴史的位置につき新たな理解を試みた。

４．研究成果
上記の手法と計画（３.「研究の方法」参照）に基づき研究を進めた結果、三つの目的（２.「研究の目的」参照）につき以下の水準での達成を得た。
　まず目的（A）（C）につき、一定程度の達成を遂げることができた。特に宣長国学の性格につき新たな視点からの理解を得た。歌学び道学び両面の後続者についても、新たな史料と研究をふまえて理解を新たにすることができた。ただし、その主内容を学術論文のかたちでまとめるには至らず、公表されたのは成果のごく一部に留まっている。この点につき、助成期間は終了してしまうが、来年度以降の継続的公表を予定している。
　対して、（B）についてはおおむね期待通りの成果を得た。ただし研究史の整理を主内容とする専論を準備するつもりはない。
　学会報告を含む具体的な成果は以下のとおりである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 島田英明	４．巻 21
２．論文標題 何を詩題となすべきかーー徳富蘇峰と漢文学の系脈	５．発行年 2021年
３．雑誌名 政治思想研究	６．最初と最後の頁 69－99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 島田英明	４．巻 133（5・6）
２．論文標題 学界展望〈アジア政治思想史〉：板東洋介『徂徠学派から国学へ』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国家学会雑誌	６．最初と最後の頁 392－394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 島田英明	４．巻 4
２．論文標題 鏡の前――菅野覚明『神道の逆襲』を読む	５．発行年 2020年
３．雑誌名 群像	６．最初と最後の頁 401－405
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 島田英明	４．巻 96
２．論文標題 夜闇へのまなざし――本居宣長とチャールズ・テイラー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アステイオン	６．最初と最後の頁 179－184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 島田英明
2．発表標題 何を詩題となすべきか――「裏面の英雄」と漢文学の系譜
3．学会等名 政治思想学会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 島田英明
2．発表標題 平民英雄論へと続く道――徳富蘇峰と漢文学の系脈
3．学会等名 北海道大学政治研究会（招待講演）
4．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

1．著者名 野口雅弘，山本圭，高山裕二編	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 201
3．書名 よくわかる政治思想	

1．著者名 日本思想史事典編集委員会	4．発行年 2020年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 718
3．書名 日本思想史事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関